

平成 31 年度

小 論 文

10 : 30 ~ 12 : 10

教養学部地域社会学科 一般入学試験

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。
提出は清書の方の 1 枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 問題冊子は 1 ~ 4 ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに申し出なさい。
5. 解答は必ず解答用紙の指定欄に記入しなさい。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。
7. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。

設問 以下の【課題文】を読んで、あとの問に答えなさい。なお、問で指定された字数はいずれも句読点を含む字数である。

【課題文】

中国史・ベトナム史を研究していた吉沢南は、ベトナム現代史の研究のために、1978年から1980年の2年間ハノイに滞在した。その間の1979年4月、吉沢は、ベトナムのランソンとドーソンを訪れた。吉沢の訪問に先立つ2月中旬、中国軍がベトナムに侵攻し、ランソンの街は中国軍によって徹底的に破壊しつくされた。瓦礫^{がれき}の街を案内してもらった吉沢は、街のなかのある建物にかつて日本軍の司令部があったことを教えられる。

ランソンの瓦礫の街の光景と日本軍のランソン攻撃とが二重映しになってしまった吉沢は、帰国後の1980年から図書館などをまわり、ベトナムにおける日本軍について文献史料の調査・研究を始めた。文献研究は吉沢の慣れ親しんだ歴史学の研究方法だった。1983年末、吉沢はある研究会で調査研究の成果として、ハノイにおける日本軍(西原機関^(注1))の報告をした。その研究会の参加者が西原機関の関係者を紹介してくれたことをきっかけに、吉沢ははじめて聞き取りにとりくむことになる。聞き取りを重ねるうちに、吉沢は、しだいに責任ある地位にいた人ではなく、文字史料を残すことがほとんどなかった無名の日本人に関心を寄せるようになった。

聞き取りへの向き合い方を決定づけたのは林文荘さんとの出会いであった。戦前、ベトナムで日本が行った黄麻強制栽培では現地指導員として台湾人が動員されていた。その一人が長崎にいて難民関係の施設で通訳をしていることを知った吉沢は、聞き取りをするために長崎に向かった。それが林文荘さんだった。

「ベトナムからいつ引揚げられたのか」という吉沢の質問に対して、林さんは「昭和54年(1979年)5月7日、ハイフォンから難民船で香港に出国しました」と答えた。この返答が吉沢に衝撃をもたらした。1979年5月といえば、吉沢がちょうどハノイに滞在していたときだったからである。^①

ベトナム現代史の研究のためにハノイに滞在していた吉沢は、ベトナム戦争後に、時々刻々と進行する華人(華僑)の大量出国やベトナム軍のカンボジア進駐、中国軍のベトナム侵攻などについて、東京大学出版会の雑誌『UP』に「ハノイで考える」という連載を書き送っていた。林さんに会い、吉沢が衝撃を受けたのは、ベトナム現代史を専攻してハノイに滞在し、右のような文章を書いていたそのときに、戦時中の日本によってベトナムに動員された台湾人が同じハノイに在住し、その人びとが難民船で出国していたことを吉沢がまったく想定していなかったことである。吉沢は、事件の背後に隠れていた日本の存在にまったく気づかずに、華人・華僑問題やベトナム・中国関係について論じていたのである。

衝撃を受けた吉沢は、それまでの研究すべてについて再検討を迫られていると感じ、1984年9月、それまで勤めていた東京都立大学を退職し、大学の研究室と図書館を飛び出して、聞き取りを含めた新たな研究にとりくむことにした。林さんとの衝撃の出会いからしばらくたった1986年、吉沢は次のように述べている。「私は歴史研究者の一人として反省せざるをえないが、日本の戦後

の歴史学は、「日本人」の民衆レベルの戦争体験を、研究の対象として真面目に位置付けてこなかったように思われる」。

研究室を飛び出した吉沢は、「日本人」の民衆レベルの戦争体験を研究するために、慣れ親しんだ文献史料と、さらに聞き取りの二つの方法で研究を進めた。なぜ吉沢は聞き取りに関心をもったのか。それは聞き取りそのものが吉沢を聞き取りの世界へと導いたからだといえるだろう。

聞き取りと文献史料には共通の面がある。いずれも聞き手(読み手)の側がどのように聞くのか(読むのか)ということに任されており、聞き手(読み手)の感度が鈍ければ聞き逃して(読み飛ばして)しまうからだ。林文荘さんの話を衝撃として受けとめる感度があつたればこそ、吉沢は聞き取りの世界へと導かれていったのである。

だが、吉沢が導かれた聞き取りの世界には、文献史料の世界と明らかに異なる面があつた。たとえば吉沢は、聞き取りについても文献史料と同様にその内容を資料ととらえ、資(史)料批判(注2)を行おうとした。吉沢は事実と資料を区別し、聞き取りの内容は事実そのものではなく、一つの資料であり、資料に対しては資料批判が欠かせないと考えた。ただし、同じ資料でも、聞き取りと文献史料には決定的な相違があつた。それは、聞き取りの相手は生きた人間^②だつたことである。吉沢は、聞き取りの史料を「生きた資料」と呼んで相手が生きた人間であることを認め、その固有性をふまえてどのように聞くのかに腐心した。「生きた資料」と対峙^{たいじ}するところに聞き取りの真髓があり、そこにまた聞き取りの難しさがあると吉沢は述べている。吉沢は聞き取りに対して文献史料と異なる固有の意味を認め、本格的にとりくむことにしたのである。

来意を告げて語り手の人生の歴史を聞くことから吉沢の聞き取りが始まる。聞き取りにあたり、吉沢は討論と沈黙に留意した。語り手の話を聞くだけでなく、語り手の感想や価値観に疑問を投げかけたり、自分の感想や評価を対置させたりする討論を行うことがあつた。討論は、先に述べた資料批判と密接にかかわっていた。ある人の話を資料批判するためには、聞き手が話の内容＝史料を読み込む必要がある。聞き取りでは、「生きた資料」である語り手に聞き手が積極的に応答することで資料批判がはじめて成り立つ。この方法には聞き取りそのものを成り立たなくさせる危険性があつたが、両者の討論によってより緊密な信頼関係が作り出される可能性もあつた。

他方で吉沢は語られなかったことについて、語り手の沈黙を大切にすることもあつたという。討論と沈黙の境目がどこにあるのか、吉沢は明瞭に語っていないが、語り手が沈黙していることや忘れようとしていると思われることについては留意して討論せずにそのままにしたり、文章にしなかつたりした場合があつた。

1986年、吉沢は聞き取りの成果を、『私たちの中のアジアの戦争』として刊行した(以下、『私たち』と略記)。『私たち』は、聞き取りの場面や経緯などをまじえて、ベトナムにおける日本軍の戦争にかかわった四人の人生を描いたものである。西原機関で電信係をしていた立花さん、台南製麻(注3)の会計係だつた河合さん、大南公司(注4)の農業指導員だつた林文荘さん、そしてハイフォンの憲兵だつた高田さんの四人である。聞き取りから歴史叙述に向かうに際して、吉沢は三つのことに留意している。聞き取りをふまえた叙述の工夫、叙述の受けとめ方、全体史の構想である。

第一の聞き取りをふまえた歴史叙述について吉沢は、討論を通じて吉沢が得た確信と情報を吉沢自身の言葉として記録したものであり、討論にこめられた吉沢の歴史観と論理で語り手の人生と歴史を再構成したものと述べている。

ところで、自分の歴史観と論理で語り手の人生と歴史を再構成したものという言い方を聞くと、あらかじめ吉沢に備わっている歴史観で語り手の人生を描いたように聞こえるかもしれない。たしかに語り手との討論では、吉沢が自らの歴史観にもとづいて激論する場面があるが、『私たち』の読後感としては、吉沢が語り手に話しかける場面だけでなく、むしろ語り手の話を受けとめ、考え、^{はんすう}反芻して自らの認識を更新していこうとする過程が強く印象に残る。とくに林文荘さんの人生を叙述した個所は、林さんの人生を描いたものであるとともに、吉沢の認識の反芻・更新の過程にもなっている。

林さんについての文章の最後に、「『日本人』・『中国人』・『台湾人』、そして難民」の小見出しがあり^③③、戦後の林さんの人生が国への帰属とかかわらせてたどられている。戦前に「日本人」にさせられ、種々の理由で戦後、ベトナムに残ることになった林さんは、1954年と59年、ベトナム在留日本人に訪れた日本引き揚げの機会に、「日本に帰る」決意をしたものの、「日本人でない」という理由で日本政府に拒否された。林さんは国外に出る希望を一貫して持ち続けたものの、戦後のベトナムは台湾政府と国交がなく、中国の文化大革命が収束に向かった1968年、中国大使館に中国籍の申請をしても返事がなかった。ベトナム戦争終結後、ハノイに日本大使館が開設されたときには、「日本人」としての帰国を申請したが、確実な返事がないなかでインドシナ情勢が変転し、1979年、林さんには難民として出国する以外の方法がなくなり、難民を選んだのである。

林さんの人生の記述は、林さんについて描いたものであるとともに、その行間からは、吉沢が林さんの語りを受けとめ、反芻する雰囲気が強くにじみ出ている。吉沢は、「語る歴史、聞く歴史」の〈現場〉と向き合い、討論し、沈黙の意味を考え、自らの認識を反芻・更新しようとしていたとっていいだろう。『私たち』の「あとがき」で吉沢は、四人の方々は自分にとって教師であり、研究仲間でもあったと述懐している。話しかけたり問いかけたりする存在であるとともに、学ぶ存在でもあった語り手。この述懐は『私たち』に対する私の読後感とも合っているし、ここに吉沢の聞き取りの実際がよく示されていると思う。そして吉沢は、この反芻・更新から「日本人」について再考し、アジアと日本の戦争と戦後をとらえ直す新たな研究にとりくんでいくことになるのである。

(出典 大門正克『語る歴史、聞く歴史—オーラル・ヒストリーの現場から—』岩波書店、2017年。
出題に際し原文を一部改変した。)

- (注1) 西原機関：1940年に西原一策陸軍少将を団長としてベトナム北部に派遣された機関。
- (注2) 資(史)料批判：歴史研究で資(史)料を用いる際、様々な面から資(史)料の正当性や妥当性を検証すること。
- (注3) 台南製麻：戦前、日本が台湾においた黄麻(ジュート)袋の製造会社。
- (注4) 大南公司：戦前、日本がベトナムにおいた小商社。

問1 下線部①で筆者は「この返答が吉沢に衝撃をもたらした。1979年5月といえば、吉沢がちょうどハノイに滞在していたときだったからである」と述べているが、吉沢が衝撃を受けた具体的な理由を、課題文の記述を踏まえて説明しなさい。(100字以内)

問2 下線部②で筆者は「聞き取りと文献史料には決定的な相違があった。それは、聞き取りの相手は生きた人間だったことである」と述べているが、吉沢は「生きた人間」を対象とする聞き取りをどのように進めていったのか、課題文の記述を踏まえて答えなさい。(100字以内)

問3 下線部③には、「林さんについての文章の最後に、「日本人」・「中国人」・「台湾人」、そして「難民」の小見出しがあり、戦後の林さんの人生が国への帰属とかがかわらせてたどられている」とあるが、吉沢の聞き取りによって明らかにされた戦前・戦後の林文荘さんの国への帰属とかがかわる体験をまず整理しなさい。そのうえで、歴史的な出来事を経験・体験した人からの聞き取りは、歴史の研究や学習の際にどのような価値や意義があるとあなたは考えるか、吉沢による聞き取りの成果も参考にしながら、あなた自身の見解を述べなさい。(600字以内)